

大学発・地域子育て支援

かまくらプロジェクト「潜在保育者プログラム（2021－2022）」の成果を通して見えてきた地域子育て支援を担う人材育成の可能性

小泉 裕子（短期大学部初等教育学科・教授）・金子 智昭（短期大学部初等教育学科・講師）
幸喜 健（短期大学部初等教育学科・准教授）・関川 満美（短期大学部初等教育学科・講師）
上田 陽子（短期大学部初等教育学科・講師）

I 潜在保育者プログラムの展開にあたって

はじめに『かまくらプロジェクト「潜在保育者プログラム（2021－2022）」』の成果を検証するに当たり、この通称「潜在保育者プログラム」の経緯について報告する。

（1）『かまくらプロジェクト』の創設から「潜在保育者プログラム」開設へ

「潜在保育者プログラム」は、学術研究所内に「子ども・子育て研究施設」が開設された折（2017年）、育児期家族の母親や父親らのワーク・ライフ・バランスに基づく子育て力の向上を図ることを目的とするプロジェクトとして『かまくらプロジェクト』が創設され、その趣旨を反映した具体的な‘まなびのプログラム’の一つとして立ち上がったものである。鎌倉女子大学が有する地域の子育て支援に取り組む専門的ノウハウを生かした『かまくらプロジェクト』は、当初ふたつのプログラムを提案し「親を支える祖父母アイデンティティの発達プログラム」と「育児期家族を支える潜在保育者の学び直しプログラム」としてスタートしている。この2つのプログラムは毎年継続的に実施され、参加者からのアンケートを元に講座の効果を検証し、内容改善を重ねながら今日の講座に至っている。

（2）なぜ「潜在保育者プログラム」を立ち上げたのか

『かまくらプロジェクト』では創設以来、地域の育児期家族にある「子育て不安」の問題を捉え、子育て支援の担い手の人材育成に関心を払ってきた。日本では、子育て支援の制度として幼児教育や保育施設などの公的機関を始め、地域の子育て支援拠点事業を拡大し多様な支援を整備しているが、残念ながらその支援の担い手が極めて不足している現状にある。そこで本プログラムで注目したのが「潜在保育者（政府は潜在保育士という）」の存在である。潜在保育士は「保育士資格を有しているにもかかわらず現在保育職に就いていない人材」と定義され、現在我が国には累計100万人と言われるほど存在している（2023）。保育施設での人材不足を掘り起こす意味でも、「潜在保育者（潜在保育士）」に掛ける期待は大きい。しかしながら、本プログラム「潜在保育者プログラム」は、敢えて「潜在保育士プログラム」と命名せず「潜在保育者プログラム」としたところに特色がある。すなわち有資格者のみならず、資格がなくても子ども・子育てに関心のある全ての者を対象とし、誰もが「子育ての当事者」意識を高めながら、地域全体の子育て支援に繋げていくプログラムを提案しているところにある。

(3)「潜在保育者プログラム(2021-2022)」の講座の趣旨と特徴

1) 対面講座からオンライン講座への展開へ

本講座は2017年以降、参集型対面講座として3年連続開設してきたが、2020年は新型コロナウイルス感染症拡大に見舞われたため中止を余儀なくされ、その後も長期間にわたる感染症蔓延に伴い、開催の危機に直面していた。そこで、従来行ってきた近隣地域の人たちへのパンフレット配布等による広報活動を改め、新たに非接触型講座を計画し、広域(地域から全国へ)性のあるオンライン・オンデマンド講座の実施に方向転換を図った。

2)「こどもまんなか社会」の実現を見据えた講座の趣旨・目的の拡大

コロナ禍が拡大・蔓延する中で、育児期家族の子育て事情は、益々深刻さを増してきている。

我が国の政府は、長期間にわたる子ども・子育て支援等の「こども政策」を社会全体で総合的に推進していく方針を打ち出し、令和5年4月の「こども家庭庁」の創設、「こども基本法」を施行する運びとなった。全ての子どもがその人権を大切にされ、大事に育てられ、その意見が尊重され、家庭や子育てに夢や喜びを感じられる社会を目指して、「こどもまんなか社会」の理念が示されたところである。

本学の「潜在保育者プログラム」はこの時代性を意識し、誰もが子育ての当事者としての意識を持ち、育児期家族の心情に寄り添い、共に子育ての喜びを実感できる人材の育成を目指すことを躊躇せず、いわゆる「子育ての伴走者」を育てる講座として地域広域的なオンライン講座へと拡大することとした。

3) プログラム内容の特徴

①どんな人材を育てるのか

どんな人材を育てるかは、前掲したように「誰もが子育ての当事者としての意識を持ち、育児期家族の心情に寄り添い、共に子育ての喜びを実感できる人材の育成を目的とすることに躊躇せず、いわゆる「子育ての伴走者」である。また参加募集にあたっては「保育の有資格者に限らず、資格のない人でも子ども・子育てに関心を寄せる人であること。また保育経験、育児経験の有無は問わないこと。」とした。

②どう育てるのか

本講座の人材育成の方法は、以下の要素を意識して構成している。

ひとつは政府が推進する「潜在保育士(学び直し)プログラム」の要素であり、もう一つは保育者養成大学としての本学が有する専門的資源(幼児教育や保育学、児童福祉に関連する人材育成カリキュラム)の要素を生かすことである。そして、こどもまんなか社会の実現を志向し、現場で活躍するマインドとスキル、また地域の育児期家庭に寄り添い身近な支援を行う子育て支援者のマインドとスキルの育成である。講座の内容には、主に本学が開講している保育者(保育士、幼稚園教諭等)養成のカリキュラムで、実際の学生指導を行っているものが生かされており、この講座の目指す「潜在保育者像」を意識し、学びやすく分かりやすい内容となるべくオンデマンド・コンテンツをラインナップした。

一方、保育現場に直接出かけて学ぶ「経験豊富な保育者とのサークル・カフェ」では、座学で学んだ知識や技術を実際の保育現場で活かすためのフィールド体験学修のイメージで計画している。保育現場の物的環境や人的環境について見学し、現役保育者との直接的な対話を通して、「潜在保育者が子育て支援に一步踏み出すためのマインドとスキル」につ

いて臨的に学ぶことが出来るようになっている。

次の章では2021・2022年度に実施した2年間の「潜在保育者プログラム」講座の効果について、参加者を対象とした質問紙調査の結果を元に検証していく。

Ⅱ 質問紙調査から見た「潜在保育者プログラム」の成果と課題

1. アンケート調査の概要

(1) 調査の目的

本調査の目的は、受講生のアンケート調査に基づき、2021年度及び2022年度の潜在保育者プログラムの成果と課題を検討しプログラムをより一層推進させるための知見を提示することである。

(2) 調査の内容

本調査は「A：受講生がプログラムを知った契機と参加動機」「B：各講座の成果と課題」「C：プログラム全体の成果と課題」の3つの内容から構成される。以下に、各内容に関する質問項目を記す。

A：「受講生がプログラムを知った契機と参加動機」に関する質問項目

① プログラムを知った契機

プログラムを知った契機として、「主催者（鎌倉女子大学）からの案内（ホームページ、パンフレットなど）」「知人（同僚やご友人など）の紹介」「以前、本プログラムに参加したことがあるため」「その他」の各項目に対して複数回答で尋ねた。教示は、「本プログラムをどのようにして知ったか教えてください。」とした。

② プログラムの参加動機

プログラムに参加した動機を自由記述で尋ねた。教示は、「本プログラムに参加しようと思った動機を教えてください。」とした。

B：「各講座の成果と課題」に関する質問項目

① 「保育実践のマインド&スキルズ編（7講座）」（2021・2022年度オンデマンド開催）

2021・2022年度実施の7講座の学修成果に関して、4段階評定（「学びになった」（4点）、「少し学びになった」（3点）、「あまり学びにならなかった」（2点）、「学びにならなかった」（1点））で回答を求めた。教示は、「各講座は、あなたにとってどの程度、学びになったか教えてください。」とした。また、学びになった理由あるいは学びに繋がらなかった理由について、自由記述で尋ねた。さらに、2022年度の受講生に対しては、学修ニーズを把握するために、今後、新たに開設してほしい講座や更に深く学びたい講座について自由記述で尋ねた。

② 「保育現場で学ぶ編（2講座）」（2021年度オンデマンド開催）

2021年度実施の2講座の学修成果に関して、4段階評定（「学びになった」（4点）、「少し学びになった」（3点）、「あまり学びにならなかった」（2点）、「学びにならなかった」（1点））で回答を求めた。また、学びになった理由あるいは学びに繋がらなかった理由について、自由記述で尋ねた。

③ 「経験豊富な保育者とのサークル・カフェ」（2021年度オンライン；2022年度対面開催）の質問項目

2021・2022年度の学修成果に関して、4段階評定（「学びになった」（4点）、「少し学びに

なった」(3点)、「あまり学びにならなかった」(2点)、「学びにならなかった」(1点))で回答を求めた。また、学びになった理由あるいは学びに繋がらなかった理由について、自由記述で尋ねた。

C:「プログラム全体の成果と課題」に関する質問項目

①プログラム全体の満足度

プログラム全体を通した満足度に関して、5段階評定(「満足した」(5点)、「少し満足した」(4点)、「普通」(3点)、「やや不満だった」(2点)、「不満だった」(1点))で回答を求めた。教示は、「本プログラムの内容は、全体を通じてどの程度、満足のいくものでしたか。」とした。

②プログラムの趣旨や意図の理解に関する項目

プログラムの趣旨や意図の理解に関して、5段階評定(「理解できた」(5点)、「少し理解できた」(4点)、「どちらとも言えない」(3点)、「あまり理解できなかった」(2点)、「理解できなかった」(1点))で回答を求めた。教示は、「本プログラムの趣旨や意図は、どの程度、理解できましたか。」とした。

③保育職への就労意識の変化

現在のところ保育職に勤めていない受講生を対象に、本プログラムに参加したことで、今後、保育職に復職もしくは就職したいという気持ちにどのような変化があったのかを、5段階評定(「高まった」(5点)、「少し高まった」(4点)、「前と変わらない」(3点)、「やや低まった」(2点)、「低まった」(1点))で尋ねた。教示は、「いま現在、保育職に勤めていない方にお聞きします。本プログラムに参加したことで、保育職に復職もしくは就職したいという気持ちにどのような変化があったか教えてください。」とした。

一方、現在のところ保育職に勤めている受講生を対象に、本プログラムに参加したことで、今後も引き続き保育職に携わりたいという気持ちにどのような変化があったのかを、5段階評定(「高まった」(5点)、「少し高まった」(4点)、「前と変わらない」(3点)、「やや低まった」(2点)、「低まった」(1点))で回答を求めた。教示は、「いま現在、保育職に勤めている方にお聞きします。本プログラムに参加したことで、今後も引き続き保育職に携わりたいという気持ちにどのような変化があったか教えてください。」とした。

④保育者効力感

現在のところ保育職に勤めている受講生を対象に、保育者効力感(三木・桜井、1998)の10項目について、3段階評定(「できるようになったと思う」(3点)、「少しできるようになったと思う」(2点)、「前と変わらない」(1点))で回答を求めた。保育者効力感とは、「保育場面において子どもの発達に望ましい変化をもたらすことができるであろう保育的行為をとることができる信念」(三木・桜井、1998)と定義され、実践に向かい、自らの専門性を高め、保育者としての成長を図っていくための原動力であると指摘されている(西山、2018)。

教示は、「いま現在、保育職に勤めている方にお聞きします。本プログラムに参加したことで、各項目が以前よりもどの程度できるようになったと感じますか。最も近いものの一つだけマークをしてください。」とした。なお、本調査の項目は、2022年度のみ実施された。

(3) 対象者

2021年度および2022年度のプログラムの全講座が終了した後、約1週間の回答期間を設けて、全員の受講生を対象にFormsによるWeb形式のアンケート調査を依頼した。その結果、2021年度は50名、2022年度は39名の計89名から回答が得られた。対象者の属性として、性別、年齢、居住地方、保育士資格・幼稚園教諭免許状の取得状況、保育職の経歴、各講座の受講状況を表1に記す。なお、「保育士資格・幼稚園教諭免許状の取得状況」と「保育職の経歴」に関しては、2022年度の受講生のみで尋ねた。回答に大きな不備がみられなかったため、以降、全てのサンプルを分析対象とした。倫理的配慮として、研究目的を文書にて説明した上で、回答はあくまでも任意であること、ならびに回答は統計的に処理されるため個人情報保護されることを記載した。

表1 対象者の属性

	2021年度 (n=50)	2022年度 (n=39)
性別	女性47名 (94.0%) : 男性3名 (6.0%)	女性37名 (94.9%) : 男性2名 (5.1%)
年齢	20代2名 (4.0%) ; 30代11名 (22.0%) ; 40代13名 (26.0%) ; 50代20名 (40.0%) ; 60代3名 (6.0%) ; 70代1名 (2.0%)	20代2名 (5.1%) ; 30代5名 (12.8%) ; 40代18名 (46.2%) ; 50代8名 (20.5%) ; 60代5名 (12.8%) ; 70代1名 (2.6%)
居住地方	北海道地方2名 (4.0%) ; 関東地方47名 (94.0%) ; 近畿地方1名 (2.0%)	北海道地方1名 (2.6%) ; 関東地方28名 (71.6%) ; 中部地方5名 (12.8%) ; 近畿地方1名 (2.6%) ; 中国地方1名 (2.6%) ; 九州地方3名 (7.7%)
保育士資格・幼稚園教諭免許状の取得状況		保育士資格もしくは幼稚園教諭免許状の取得者30名 (76.9%) ; 保育士資格及び幼稚園教諭免許状の非取得者9名 (23.1%)
保育職の経歴		現在保育職に勤めている者13名 (33.3%) ; 現在保育職に勤めていないが過去に勤めた経験がある者8名 (20.5%) ; 過去に一度も保育職に勤めた経験がない者18名 (46.2%)
各講座の受講状況	「保育実践のマインド&スキルズ編(7講座)」注47名 (94.0%) ; 「保育現場で学ぶ編(2講座)」43名 (86.0%) ; 「経験豊富な保育者とのサークル・カフェ(オンライン開催)」23名 (46.0%)	「保育実践のマインド&スキルズ編(7講座)」注39名 (100%) ; 「経験豊富な保育者とのサークル・カフェ(対面開催)」4名 (10.2%)

注：「保育実践のマインド&スキルズ編(7講座)」は、一つの講座でも動画で視聴した場合、受講した者としてカウントした。

2. 結果と考察

(1) 受講生がプログラムを知った契機と参加動機

プログラムを知った契機の各項目について、各年度および全体の度数(%)を算出した(表2)。全体的な傾向として、「その他」が最も多く、次いで「主催者(鎌倉女子大学)からの案内」「知人(同僚やご友人など)の紹介」「以前、参加したことがあるため」であっ

表2 プログラムを知った契機の年度ごとの度数（％）

	2021年度の度数	2022年度の度数	全体の度数（％）
主催者（鎌倉女子大学）からの案内	11（22.0％）	13（33.3％）	24（26.9％）
知人（同僚やご友人など）の紹介	11（22.0％）	10（25.6％）	21（23.5％）
以前、参加したことがあるため	2（4.0％）	2（5.1％）	4（4.49％）
その他	26（52.0％）	14（35.9％）	40（44.9％）
合 計	50（100％）	39（100％）	89（100％）

注：一人の対象者は、複数の項目を選択している場合がある。

表3 プログラムに参加した動機のカテゴリーと記述例

カテゴリー	記述例
保育への興味	<ul style="list-style-type: none"> ・保育の仕事に興味があり、これに関して学べると思ったから ・今後の子育てや子育て支援、教育支援に携わる機会があれば、保育の現場がどのようなものか、具体的に知るきっかけになると思って ・現在の保育園事情を知りたかったから
プログラム内容への興味	<ul style="list-style-type: none"> ・内容が充実していて、面白そうだったから ・保育士の資格を国試取得だったので大学の先生方の講座を聴いてみたかったから ・鎌倉プロジェクトに関心があったから
就職のため	<ul style="list-style-type: none"> ・資格はあるが職場経験がなく、働いてみたいが実際どういったものなのか見てみたかったから ・保育士の資格を活かして将来仕事、またはボランティアをしたいと思っており、その為に勉強しておきたいから
資格取得のため	<ul style="list-style-type: none"> ・保育士資格を目指し勉強しているが、テキストに向かっての勉強だけでは実際に現場に出たときにやっていけるのか不安があったから
自己研鑽	<ul style="list-style-type: none"> ・経験が浅いため、少しでもスキルアップしたくて参加を決めました ・保育の実践経験がないため知識を増やしたかったから ・保育状況が日々変わっているので自分自身の勉強のため
子育てや子育て支援のため	<ul style="list-style-type: none"> ・子育てに役立てたいから ・小規模保育園で子育て支援をしているので参加を希望しました ・現在子育て支援サークルなどの支援者として従事しているため
受講のしやすさ	<ul style="list-style-type: none"> ・オンデマンドで受講が出来るため時間に縛られずに、柔軟に講座を聞くことができると思った ・資格なしでも参加できるプログラムだったため ・自宅でスマホからでも受けることができるというのが、参加しやすかったため

た。なお、「その他」の回答は、「神奈川県広報誌」「市の施設（図書館等）のちらし」「子育てサポートセンターからの案内」「神奈川県福祉人材センターのメールマガジン」「インスタグラム、フェイスブック、ツイッターなどのSNS」、などであった。また、プログラムに参加した動機に関する自由記述の内容を簡略化し、類似した内容をグルーピングした結果、7つのカテゴリー（「保育への興味」「プログラム内容への興味」「就職のため」「資格取得のため」「自己研鑽」「子育てや子育て支援のため」「受講のしやすさ」）が確認された（表3）。

(2) 各講座の成果と課題

A: 講座「保育実践のマインド&スキルズ編」

① 講座の概要 (表4)

開催年度: 2021年度および2022年度 開催方法: オンデマンド

表4 保育実践のマインド&スキルズ編の概要

講座	講座の概要
第1回 絵本と実践 (担当) 関川満美・ 幸喜健	保育現場や子育て家庭においても身近な児童文化財である絵本。それぞれの発達過程に応じて、触れてほしい絵本やその魅力を保育現場のエピソードとともに紹介した。その際、具体的にどのような絵本が親しまれているのかがイメージしやすいよう、複数の絵本(表紙)を提示した。また、絵本の役割、取り入れる意義を十分に考慮し、子どもの育ちに合わせた絵本選びができるよう選書のポイントや実践的な技術について講義を行った。
第2回 音楽あそびと実践 (担当) 渡辺宏章・ 青山真以子	パーカッションは誰でも簡単に音を出すことができるため、幼児にとって安心感があり、扱いやすい楽器である。子どもの音楽に欠かせない楽器であるパーカッションに親しみ、その魅力を再発見して、音楽あそびやアンサンブルに役立てる方法や、手作り楽器による即興演奏の指導法等について解説した。楽譜と映像を用い、パーカッションの個性あふれる響きを紹介し、演奏のポイントや、音楽活動における実践方法等について解説した。
第3回 運動あそびと実践 (担当) 西島大祐	幼児期の子どもの運動遊びについて、子どもの成長・発達といった観点から資料を用いて説明した。また、見本を交えた動画説明によって、自宅のできる運動遊びについて紹介するとともに、自宅周辺で簡単にできる野外遊び・自然遊びの実践例を紹介した。野外遊び・自然遊びについては、自宅の外に出て活動していただくことを推奨し、実践的な視点から子どもたちの発達年齢や興味・関心を考え、取り組めるような講座内容とした。
第4回 乳幼児と健康 (担当) 白子純子	子どもたちの「健康」について、どんなことが起きているのか、新型コロナウイルスの影響や、HSPなど最近の子どもたちの状況を説明した。また、現場での「これだけでは知っておきたい知識」として、最近の子どもたちの事故やケガについて(歯ブラシ事故、知育玩具による事故、加熱式タバコによる誤飲事故、窒息の起きる仕組み等)や、緊急時の対応について、主にアレルギー出現時の緊急マニュアルの概要など基本的なものを紹介した。
第5回 保育者のマインド (担当) 金子智昭	保育者は、子どもの想いを尊重した保育を実現することを切に願うが、いざ保育現場に立つと個性あふれる子ども一人ひとりと向き合うことや、子どもの想いを汲み取った丁寧な保育を実践することの難しさを痛感することがある。本講座では、このような保育者の実情を考慮して、子どもと向き合う保育者の心のあり方に関して、心理学の分野で脚光を浴びている「マインドフルネス(mindfulness)」の概念を中心に、様々な保育事例を交えて話題を提供した。
第6回 障害児の保育 (担当) 中村真一	本講座では、発達障害児の保育についてとりあげている。「障害」は、その有無で二分されるかのように記されている。障害者基本法では、継続的に日常生活又は社会生活に相当な制限を受ける状態にあるものとしている。しかし「ある」「なし」の境目は判別し難いものである。しかも、障害の状況は一人ひとり異なる。一人ひとりの能力や苦手さと向き合いながら共に学ぶ教育や保育の環境を提供していくことが重要である。子どもの持っている力を引き出ししていくために押さえておきたい基本を紹介している。

講座	講座の概要
第7回 保護者とのかかわり (担当)上田陽子	保育者には、保護者のもつ様々な悩みに向き合い、ともに考えていく姿勢、子育てのパートナーとしての役割が求められている。現代の保護者を取り巻く子育て環境と子育て支援について、保護者との信頼関係をどのように築いていくか、子どもの成長の共有の重要性、特別な配慮が必要な保護者とのかかわりや支援について等を、鎌倉女子大学幼稚園に勤めた経験を踏まえ、様々な事例を通して参加者と共に考える機会をもった。

②成果と課題

「保育実践のマインド&スキルズ編」の7講座の学修成果について、各年度の加算平均値（標準偏差）、並びに年度ごとの平均値（標準偏差）を算出した（表5）。その結果、全ての講座の平均値は3.00（「少し学びになった」）を超えており、多くの受講生は高い学修効果を認識していることが示された。さらに各年度で差があるか否かを検討するために t 検定を行った結果、「第2回 音楽あそびと実践」の得点は2022年度の方が2021年度よりも有意に高いことが示された（ $t(65) = 2.02$ 、 $p < .05$ ）。それ以外の講座については、有意な差は確認されなかった。

学びになった理由あるいは学びに繋がらなかった理由の記述例を、表6に記す。学びになった主な理由としては、実践例が多く具体的な内容であったこと、受講者がこれまでの経験を捉え直す契機になったこと、講座が面白く興味深い内容であったこと、講座の目的が明確であり統一感があったこと、保育に関する最新の情報が多かったこと、などが挙げられた。一方で、学びに繋がらなかった主な理由としては、既に知っている内容であったこと、動画の配信期間が短く全ての動画を視聴できなかったこと、講義内容の質問ができなかったこと、理想論であり現場との乖離が著しかったこと、などが挙げられた。

今後、新たに開設してほしい講座や更に深く学びたい講座の自由記述を精査した結果、新たに開設してほしい講座としては、「保育現場での書類作成作業のコツ」「0～2歳児向けの実践講座」「保育とICT」「手遊びやわらべ歌」「造形や絵画」「幼児教育と脳科学」「保育の一日」「保育士あるある Q&A」、などが挙げられた。さらに、更に深く学びたい講座としては、「障害児の保育（発達障害の種類ごとの対応、気になる子への対応、障害児を持つ保護者への対応、療育など）」「保育者のマインド」「保護者とのかかわり」「交流型の音楽や運動講座」などが挙げられたが、とりわけ「障害児の保育」に関連する学修への要望が多いことが確認された。

表5 「保育実践のマインド&スキルズ編」の学修成果の年度ごと比較

各講座	全体の <i>M</i> (<i>SD</i>)	2021年度の <i>M</i> (<i>SD</i>)	2022年度の <i>M</i> (<i>SD</i>)	<i>t</i> 値	効果量 (<i>d</i>)
第1回 絵本と実践	3.74 (0.49)	3.70 (0.46)	3.78 (0.53)	0.71	.16
第2回 音楽あそびと実践	3.61 (0.65)	3.46 (0.75)	3.76 (0.75)	2.02*	.46
第3回 運動あそびと実践	3.62 (0.63)	3.54 (0.68)	3.70 (0.57)	1.13	.26
第4回 乳幼児と健康	3.83 (0.41)	3.80 (0.40)	3.86 (0.43)	0.54	.12
第5回 保育者のマインド	3.81 (0.45)	3.76 (0.48)	3.86 (0.41)	1.00	.22
第6回 障害児の保育	3.81 (0.39)	3.79 (0.41)	3.84 (0.37)	0.53	.12
第7回 保護者とのかわり	3.82 (0.39)	3.77 (0.42)	3.86 (0.34)	1.07	.24

注：一人の対象者は、複数の項目を選択している場合がある。

表6 「保育実践のマインド&スキルズ編」
学びになった理由あるいは学びに繋がらなかった理由の記述例

【学びになった理由の記述例】

- ・保育士試験で学んだ事とは違い、より具体的な内容でよい学びになった(2021年度)。
- ・これまでの子育ての経験や保育士試験の勉強で学んだ事に加えて、講座を受けた事によって、より実践的に理解することができた(2021年度)。
- ・実際に講師の方の話や実体験、今の保育の現場での生の声を聞いたことがとても刺激的だった(2021年度)。
- ・どの講座もとても面白く、興味深く、ためになり、動画を作っている先生方の熱意が伝わってきた(2021年度)。
- ・保育現場の移り変わりが知れたのと、今一度保育に関する様々な知識が知れてとても良い学びになった(2021年度)。
- ・実際の保育場面を想像して、自分だったらどのように活動するかが意識できる内容だった(2021年度)。
- ・何となく知っているつもり、分かっていたつもりが出来事を、事例などで知る機会になり、自分自身の自信に繋げる事が出来た(2022年度)。
- ・テキストや問題集だけでは触れられない現場で必要となる要素が(全てでは無いと思いますが)込められていると感じ、大変楽しく興味深く学べました(2022年度)。
- ・どの講座も今までの経験と照らし合わせながら受けさせて頂き、大変学びになりました。経験があっても、保育は正解がない分、色々な方の話を聞く事、事例や経験した話を聞く事が大切だと改めて感じました(2022年度)。
- ・各講座で統一感のある動画が作成され、わかりやすく、安心して楽しく聴講できました。内容も、具体的な事例を取り上げながら、実践につなげやすいものでした(2022年度)。
- ・講座の目的が明確に示されていて、先生方の朗らかなお人柄も垣間見ることができて、講座の内容がどれも大変興味深かった。前回から発展した内容になっていたり、さらに学びを深めたい場合のアドバイスもあり、充実した内容だった(2022年度)。
- ・前回も受講しているため、最新の情報などを補充頂けたのはありがたかった。1年経って、忘れていたことも復習として思い出せ、改めて学び直せた(2022年度)。

【学びに繋がらなかった理由の記述例】

- ・既に知っていることが多かった(2021年度)。
- ・期間内に全ての動画を視聴する事ができず、大変残念だった(2021年度)。
- ・授業の途中で浮かんた疑問などがオンデマンドでは質問できず、実際に大学でスクーリングのように受講できたらもっと理解が深まると思った(2021年度)。
- ・理想論であり、現場との乖離が著しいと感じた(2021年度)。
- ・具体的な実践例をもっと知りたかった(2021年度)。
- ・基本的に知っている知識、内容だった(2022年度)。

B：講座「保育現場で学ぶ編」

①講座の概要（表7）

開催年度：2021年度 開催方法：オンデマンド

表7 保育現場で学ぶ編の概要

講座	講師	動画の概要
【第1回】 幼稚園の保育環境 幼稚園教諭の一日	K 幼稚園 園長	<p>3、4、5歳児、それぞれの保育環境について、各学年におけるねらい、保育者の意図や思いも含め、実際に園内を回りながら園長より紹介を頂いた。また、園庭においても砂場や築山、固定遊具等、それぞれの環境に込められた思いについてお話頂いた。次に、幼稚園教諭の一日として、子どもの一日の園生活と共に、写真や動画を通して紹介をした。K幼稚園では、特に主体的な遊びからの学びを大切に保育しており、子ども一人ひとりの興味関心に応じて、遊びを提案したり、一緒に遊ぶ中で励ましたり、認めたりしながら、子どもたち一人ひとりの、また集団の育ちを支える役割を担っている。園長へのインタビューでは、「保育者としてのやりがいとは何か（→子どもが伸びていく姿に常に会える、子どもの優しさに直接触れることができる）」「保育者として求められることは何か（→子どもも保護者も人と関わるよさ、喜びを味わえるようにしていく）」について、経験を交えながらお話頂いた。</p> 
【第2回】 保育所の保育環境 保育士の一日	K 保育所 園長	<p>認可保育所の保育環境について0・1歳児室、2歳児室、ランチルーム、そして園庭の順番で、日々営まれている保育内容や実際にそこで過ごしている子どもたちの姿を交えながら動画で紹介した。保育所は低年齢児が長時間過ごす場となるため家庭的な雰囲気子どもたちが安定して過ごせるように配慮された環境、ゆとりある保育の内容となっている。子どもたちはそのような環境の中で思い思いに好きなことに取り組んだり、集団遊びを通して友だちとの関係を築いていく経験を重ねたりし、それを支える保育者の援助も動画では見ることができる。次に保育士の一日を開園から閉園までの園生活の流れを追いながら写真や動画で紹介した。園長へのインタビューでは、低年齢児の保育における配慮と留意点や子育て支援員についてお話いただいた。物的環境の充実や、子どもが育つ上で多様な人との関わりが大切であり、保育士や子育て支援員といった園スタッフ、外部講師、地域住民など多くの大人と触れ合う機会を設けるような人的環境にも気を配られていることが伺われた。</p>

②成果と課題

「保育現場で学ぶ編」の2講座の学修成果について、平均値(標準偏差)を算出した。その結果、「第1回 幼稚園の保育環境 幼稚園教諭の一日」の $M(SD)$ は3.45(0.66)、「第2回 保育所の保育環境 保育士の一日」は3.52(0.61)、であった。両講座の平均値が3.00(「少し学びになった」)を超えており、多くの受講生は高い学修効果を認識していることが示された。

学びになった理由あるいは学びに繋がらなかった理由の記述例を、表8に記す。学びになった理由としては、園長の話聞いて保育を行う上で大切にすべきことや留意すべきことが分かったこと、保育環境に込められた保育者の想いやこだわりを知ることができたこと、幼稚園と保育所の違いが理解できたこと、動画に解説があり実際の保育現場を具体的にイメージできたこと、などが挙げられた。一方で、学びに繋がらなかった理由としては、既に知っている内容であったこと、保育現場の実態とはかけ離れた園紹介動画のような印象を受けたこと、動画を期限内に見ることができなかったこと、保育者の一日のスケジュールを見ることができなかったこと、などが挙げられた。

表8 「保育現場で学ぶ編」

学びになった理由あるいは学びに繋がらなかった理由の記述例

【学びになった理由の記述例】

- ・実際の幼稚園・保育園の環境を見せていただき、また園長から心掛けているポイントをオンラインですが現場でご説明いただけて、大変参考になった。
- ・何気なく置かれている様な園内の物でも、先生方の思いやこだわりが詰まっている事を知って驚いた。
- ・映像で見ることで、園が工夫して取り組まれている内容がよく分かった。
- ・現場の実際の雰囲気がリアルに伝わってるとともに、幼稚園と保育園の違いも知れて良かった。
- ・園長のお話を聞けて、保育する上での大切なこと、留意点を聞けて、とても勉強になった。
- ・子どもたちが遊んでいる様子が見れたこと、園長の優しいお人柄から本当に幸せが溢れる場所なのだった。
- ・大切にしていることやこだわりが園によって様々であるため、園の理念や雰囲気などが自分に合う園と巡り会えたら長く心地よく働けるのだろうと思った。
- ・動画に解説があった為、実際の現場を具体的にイメージすることができた。一ヶ所だけではなく、幼稚園と保育園、両方を見ることができたことも良かった。
- ・保育所での子どもたちの様子を知ることができた。大人しい子ばかりだった事が意外だった。ストレスの溜まらない環境が築かれているのだと納得した。
- ・実際の現場での子どもたちや保育者の様子を拝見し、年齢層によつての保育内容の違いを学ぶことができた。また保育士と子育て支援員の仕事の違いも知る事ができ参考になった。

【学びに繋がらなかった理由の記述例】

- ・既に知っていることが多かった。保育所の様子は、保護者として知っていることが多かった。
- ・実際の保育現場はもっと大変な場面もあるはずなのに、保護者に向けた園紹介動画のような印象で、全体的にあまり伝わらなかった。保育者の必要性を伝えるのであれば、保育現場のリアリティを伝えた上で、やり甲斐や、働きやすさ、待遇、存在意義など、今求められている保育者というものを訴える方が、良かったのではないと思う。
- ・動画を見る時間が取れなかった。期日内に見れなかった。
- ・先生の1日のスケジュールを具体的にみてみたかった(保育士、パート別々に)。
- ・子どもと接するときの保育士の注意点、園庭での注意点など、どんなことに気をつければ良いのかも一緒に分かればなお、現場で役立つように感じた。

C：講座：「経験豊富な保育者とのサークル・カフェ」

①講座の概要（表9、表10）

開催年度と開催方法：2021年度は Zoom を用いたオンライン開催（約2時間）、2022年度は対面開催（約2時間）にて実施された。

表9 2021年度 経験豊富な保育者とのサークル・カフェ（ライブ配信）の概要

1. 企画趣旨（5分）	
2. プレイアウトルームを用いたサークル・カフェ（90分）	
グループ	講 師
A	F 保育園 園長 I 幼稚園 園長
B	J 保育園 園長 M 認定こども園 副園長
C	H 保育園 園長
3. 各講座からの報告（10分）	
4. 講座の終わりに（5分）	

表10 2022年度 経験豊富な保育者とのサークル・カフェ（対面開催）の概要

1. 企画趣旨（5分）	
2. 施設紹介・保育観察（40分）	
3. 園長とのトークセッション（35分）	
4. 講座のまとめ（10分）	
場 所	講 師
H 保育園	H 保育園 園長
K 保育園	K 保育園 園長
K 幼稚園	K 幼稚園 園長

2022年度（対面開催）における講座の概要

H保育園

文責 司会進行役 金子智昭

司会者による企画・趣旨の説明が行われた後、園長の解説を交えながら、園見学が行われた（図1）。H園は、横浜市認可の小規模保育所であり、ビルの1階のワンフロアに設けられている。保育室では、0歳～2歳児の子どもたちが保育士に温かく見守られながら、安心・安全な環境の下でのびのびと過ごしている。0歳児と1・2歳児が過ごす空間にはパーテーションが引かれており、ワンフロアの中で年齢に応じた適切な保育を行うことができるよう工夫されている。見学時、0歳児は離乳食の時間であり、保育士は「今年の0歳児は好き嫌いなく、本当によく食べるんですよ」と嬉しそうに述べていた。また、園長は「0歳児は成長しようとする力をものすごく秘めており、子どもと接する中で毎日が驚きと喜びの連続です」と保育の魅力を述べていた。一方で、1・2歳児はお散歩から帰った後の室内遊びの時間であり、お絵描きをする子、粘土で遊ぶ子、ブロックで遊ぶ子、おままごとで遊ぶ子など、一人ひとりの子どもたちが自分の好きな遊びや活動に夢中になっている様子であった。H園の保育目標は、「子どもたちが夢中になり、あそびこむ中で、情緒の安定、思考力・判断力、表現力を育てる」ことであり、実際の保育にもこのような理念が浸透していた。また、「人は人の中でしか人にはなれない」というスローガンの下、町で出会う多様な人との関係を大切にし、子どもたちが“まち”や“人”の中で育っていくための土壌をつくる「まち保育」という特色を有している。園長は午前中のお散歩を振り返りながら、「お散歩はこの『まち保育』の一環であり、目的地に行って帰ってくるだけが目的ではなく、お散歩を通して子どもたちが多様な人と出会う機会や人との繋がり

を大切に育んでいます」と想いを述べていた。さらに室内の環境に目を転じれば、子どものごっこ遊びが盛り上がるように、手すりに道路の絵が描かれたシールが貼られているなど先生方のきめ細やかな工夫や子どもの育ちへの想いが所々に込めていた(図2)。

園見学の後、サークル・カフェが行われた。園内研修の取り組みとして、子ども理解を深めるためのドキュメンテーションの活用事例を紹介していただいた。事例は、0歳児の子どもが保育士との関わりを通して、風船の遊び方が転がすことから吊るした風船をジャンプして叩く遊びへ展開されて、子どもの中に多様な気づきや発見が芽生えるというものであった。そしてドキュメンテーションという記録方法を通して、保育士自身の子ども理解の視野が広がり、写真を介して職員同士にも子ども理解の輪が広がっていく効果があることが語られた。次に園長より、「質の高い保育」には決められたものがあるわけではなく、日々の保育を振り返ったり、子どもの姿から保育のあり方を話し合ったりする土壌が育っている園であれば、自然とそれが質の高い保育に繋がっていくものであるというお話をいただいた。子どもと関わる姿勢として、子どもを一人の人として対等に関わっていくことや「全受容」することの大切さについてお話しいただいた。最後に、参加者からの質疑応答が行われた。その中で特に「子ども自らが育つ保育を実現させるためにはどうすれば良いか」というテーマに関して議論が交わされた。そのための方針として、保育者が「～すべき・ねばならない」という観念に縛られず保育を楽しむ姿勢を大切にすること、保育をサービスではなく子どもの“根っこ”を育てる教育的な営みであることを認識すること、大人一人ひとりが当事者として地域で子どもの育ちを支えているという自覚を持つこと、教え込みの保育から脱却し遊びの中で育つ子どもの力を大切に育むこと、海外の保育を参考に国内の保育士の配置基準を見直すこと、などの多様な意見が活発に交わされた。



図1 園見学の様子



図2 保育環境の工夫

K 保育園

文責 司会進行役 関川満美

K 園は日頃より保育者養成校における様々な学びに協力をいただいている園である。実習生の受け入れ以外にも、保育系授業に関しての園見学や学びの実践の場、多様な形で保育の学びを深める機会を提供している。K 園は鎌倉市に位置しており、広々とした園庭と3階建ての園舎にはいつも子どもたちの明るい声が響いている。園舎内は3～5歳児の保育室が1階、0～2歳児が2階に設けられ、自由遊びの時間には子どもたちが主体的にク

ラスの枠を超えてそれぞれの保育室を行き来したり、遊びに加わったりする様子がみられる。

本講座の実施にあたっては、潜在保育者を対象とした講座であることから、受講生が保育現場の実態に触れ、保育活動に参加しながら子どもの育ちを学ぶ機会が得られるように、また、保育者の仕事の実際についても知見が得られるように配慮したプログラムを検討いただいた。当日は主任保育士および副主任保育士が主となり、見学と併せて活動内容や環境構成の工夫等についての解説を行った。

園見学では、各発達過程の特色が感じられるような活動を見ることができた。外遊びを楽しむ4歳児はドッジボールのようなルールのある集団での遊びにも慣れており、保育者も一緒に参加していたものの、活動自体は子どもたちが主体となって進めていた。5歳児は保育室でサークル状になり、歌やわらべうた遊び等の集いを行っていた。受講生が見学を訪れると自然に輪の中に受講者を招き入れ、手を繋ぎ一緒にわらべうた等を楽しんでいた。3歳児クラスは「お店屋さんごっこ」を行っており、2歳児クラスの子どもたちがそこに遊びに来ていた。3歳児はアイス屋さんやクレープ屋さん、クッキー屋さん等になりきりながら、お客さんとのやりとりを楽しみ思い思いの商品を買った。2歳児は、保育室隣のランチルームでそれらを食べる（真似）をしていた（図3）。0、1歳児クラスはテラスや室内で保育者に見守られながらゆったりと遊んでいた。調乳室や昼の匍匐スペース等、他クラスには見られない環境の特徴について説明を受けながら見学を行った。

園見学後のサークル・カフェでは、園の概要と職員体制の説明があり、現在保育所で勤務している、元潜在保育者の活躍について講話をいただいた。実際に元潜在保育者（5名の保育者）が、保育所で勤めることになった経緯や現在の勤務日数・時間、保育における自身の役割等について具体的に話をした（図4）。元々保育職に就いていたが子育てのために職を離れ、約20年振りに復職した方、給食室の手伝いとして勤務していたところから保育士試験を受験して資格を取得し、担任を担うようになった方、保育士資格は所持していないものの自身の子育て経験を生かし母親のような視点で子どもと接したり環境整備に気を配ったりする方等々、それぞれの保育者の事情や得意分野を考慮した働き方が実践されている中で、一人一人がやりがいを感じ職務に向き合っていることが語られた。また、こうした保育者の確保が、細やかな配慮の行き届いた日々の保育を実現していることも見



図3 2歳児との関わり



図4 現職(元潜在保育者)による講話

学・講話を通じて感じられた。これらの見学および講話を受けて、受講者からは「保育職への関心はあったものの、自分に何ができるのかと悩んでいたが、今日の話聞きエールをもらった」「子どもの主体性を大切にする保育の姿勢に感銘を受けた」等、保育に対する前向きな気持ちが芽生えたことが語られた。

K 幼稚園

文責 司会進行役 上田陽子

K 園は、日頃より、学生の見学や実習等、実践的な学びの場としても活用されている。また、『湧き出る探求心を育む』『弾む身体を育む』『仲間という・仲間となる楽しさを育む』を教育方針とし、教育的に価値のある魅力的な環境のもとで、幼児がさまざまなことに興味や関心を持ち、のびのびと全身を使って遊んで、心も身体も豊かに発達させていくことができるよう、一人ひとりに応じた適切な援助をしている。広々とした園庭には、卒園生が記念樹として植えてくれたジュンペリーの木がシンボルツリーとして存在し、その他、梅や桑、夏みかん、柿、銀杏など、四季を感じることが自然とできるような環境が整い、また、築山や大小に分かれた砂場、固定遊具等、身体を活発に動かし、自ら挑戦する気持ちがもてるような魅力的な環境となっている。園舎は、カトレア館・ひまわり館の2つがあり、カトレア館の1階には3歳児3クラス、2階には4歳児3クラス(2024年度からは、他の施設を利用して実施されていた未就園児親子2歳児たんぽぽクラス・満2歳児すみれクラスがカトレア館3階へと移転。今回のサークル・カフェの実施場所)、独立して5歳児はひまわり館1階に2クラス、2階のホールは5歳児が中心に利用するが他学年も利用、主体的な遊びからの学びを大切にした保育をしており、3学年が自然と混ざり合い、関わり合いながら育つことも大切にしながら保育活動を展開している。

本講座の実施にあたっては、事前に園長と司会者として、参加者からの事前質問についての確認、及び2021年度実施の講座「保育現場で学ぶ編(オンデマンド配信)」、「経験豊富な保育者とのサークル・カフェ(Zoomでのオンライン形式)」においての振り返りを行い、参加者のより学びたい内容に焦点を当て講座を進めていけるよう、また当日の流れ等の打ち合わせも行った。

当日は、5歳児の卒園遠足に園長が引率のため、K幼稚園のみ午後からの実施となった。まず、園見学を副園長と司会者として行った。3歳児、4歳児、5歳児の順でそれぞれの保育室環境を、保育のねらいや保育者の意図・思いも交えて紹介した。生活発表会の前後ということもあり、行事に向けての様子も感じることができる保育室環境となっており、ねらいは共通しているものの、そのクラスによっても担任のカラーが出ていて面白いとの感想も頂いた(図5)。

園見学後の園長を囲んでのサークル・カフェでは、まずは、現場における潜在保育者の役割とはというテーマで、園長より講話を頂いた。幼稚園では担任ではなくとも、担任の補助的立場、預かり保育担当といったような道、障害児の加配等といった立場もあり、しかし、実態としては、成り手が少なく、保護者に頼んでいるという園さえある。0、1、2歳児の小規模保育所も、ある程度人生経験のある方も求めている。現在、虐待ということも珍しいことではない。これは母がゆったりと育ててもらえてこなかったことが原因であることが多い。子どもが母を殺害してしまうという報道があるたびに胸が締め付けられ

る。これは、子どもがかわいそうであり、母が大好き、愛されたい思いがありつつも母を殺してしまうという負の連鎖である。どこかで断ち切る必要があり、子育て支援といった場所などもあるが、そこに相談にまでいけないのが母であり、幼稚園、保育所がそれを救う場所となる。若い先生にはどうしても難しく、人生経験を積み重ねてきた人、潜在保育者のような存在が重要である。また、もう一つ、園長自身も大切にしていることであるが、子どもたちに甘えられる存在でいることを大事にしてほしい、これが大きな役割であるとのことであった（図6）。

その後、参加者からの質疑応答へと移った。現在、放課後デイサービスにて障害児とのかかわりがあるAさんからは、かかわる際にどのようなことに気をつけていったらよいかとの質問があり、園長より、基本的には、一人の人間、配慮は必要であるが、配慮のし過ぎはよくない。いざこざなどが起こりそうになるとその前に止めてしまうという姿もあるが、そのままぶつかる機会も必要であり、かばいすぎず、友だちに言われることも必要で、守り過ぎないこと、経験を奪い過ぎないようにとのお話があった。小規模保育園で調理師として働いているBさんからは、ママさん保育士と、預けている保護者との考えのずれに悩んでいるとのことで、子どもを真ん中と言いつつも、母が真ん中という親が多く、また、下の子が生まれて、上の子を保育園に長時間預けるため、上の子のことも考えてほしいとの保育者の意見があり、両者に対してどのように応えていったらよいかとのことであった。こちらに対しては、これは、日本の政治が悪い。オランダは、世界一子どもが幸せな国と言われるがそれはなぜか。日本より経済が豊かでも何でもないが、夕方6時にはお店がすべて閉まる。開いているのは、夜のBarとレストランのみ。非常勤と専任の給料も一緒。選択できる。非常勤だからといって出世できないということもない。とにかく、母の気持ちが楽。ゆったりと子育てしている。土日もちろん休みで、育児休暇も父も母もしっかりとれる。保育園を増やすようにというが、子育てをしやすい環境も大事。深夜まで預かっている保育所、本来はありえない。保育所のやり方自体が間違っており、みんなで日本の子育て環境を、親が働く環境、地域環境を変えていく必要がある。Bさんには、是非、そのお母さまに「頑張っているじゃない」と声を掛けてあげてほしい、との言葉があった。

今回の講座では、参加人数が少なかったこともあり、それぞれゆっくりと質疑応答の時間もとることができ、概ね満足されて帰った様子であったが（後日、受講生より頂いた手



図5 園見学の様子



図6 園長とのサークル・カフェ

紙の内容より抜粋：「学年ごとに大きく成長する子どもたちの姿を感じることができました。」「日本の保育を取り巻く現状、子育て支援のあり方や、子育てがしにくい社会の中で、保育園で子どもとかかわる一人として改めて色々と考ええるきっかけとなりました。」、今回のように潜在保育者ではない方の参加もあるため、話す側としては、内容をさらに吟味していく必要があるとの振り返りがされた。

②成果と課題

「経験豊富な保育者とのサークル・カフェ」の学修成果について、各年度の加算平均値（標準偏差）、並びに年度ごとの平均値（標準偏差）を算出した（表11）。その結果、両年度の講座の平均値は3.00（「少し学びになった」）を超えており、受講生は高い学修効果を認識していることが示された。さらに、各年度で差があるか否かを検討するために t 検定を行った結果、有意な差は確認されなかった。

学びになった理由あるいは学びに繋がらなかった理由の記述例を、表12に記す。学びになった理由として、2021年度のオンライン開催では、現場で活躍している園長の話聞いて感銘を受けたこと、他の受講生の悩みや考えを知ることができたこと、保育現場へ踏み出す勇気を得たこと、グループ分けにより質問しやすかったこと、などが挙げられた。2022年度の対面開催では、実際に保育に参加したり観察したりする中で保育の魅力を体験できたこと、他の参加者と話しができたこと、などが挙げられた。一方で学びに繋がらなかった理由としては、2021年度のオンライン開催のみに確認され、具体的には掘り下げた話ができなかったこと、参加者が話せる時間や質問の時間が少なかったこと、他の園の話が聞けなかったこと、などが挙げられた。

表11 「経験豊富な保育者とのサークル・カフェ」の学修成果の年度ごと比較

全体の M (SD)	2021年度(オンライン開催) の M (SD)	2022年度(対面開催) の M (SD)	t 値	効果量 (d)
3.83 (0.46)	3.80 (0.50)	4.00 (0.00)	0.78	.42

(3) アンケートから得られたプログラム全体の成果と課題

2年間のプログラム全体の成果と課題を確認するために、プログラム全体の満足度、プログラムの趣旨や意図の理解、保育職の就労意識の変化について、各年度の加算平均値（標準偏差）、並びに年度ごとの平均値（標準偏差）を算出した結果、全ての項目において4.00（「少し満足した」「少し理解できた」「少し高まった」）を超えていた（表13）。さらに、各年度で差があるか否かを検討するために t 検定を行った結果、有意な差は確認されなかった。また、保育者効力感の変化について10項目の加算平均値（標準偏差）を算出した結果、2.00（「少しできるようになったと思う」）を若干下回っていた。保育効力感の向上に関しては課題が残されたものの、本プログラムは全体を通じて高い成果が得られたことが確認された。

表12 「経験豊富な保育者とのサークル・カフェ」
学びになった理由あるいは学びに繋がらなかった理由の記述例

【学びになった理由の記述例】					
<ul style="list-style-type: none"> ・I 幼稚園の園長のお話の中で、「子どもによって遊びが変化できるものを環境の中にたくさん取り入れている」「言われたことよりも、自分で何かできる・発見できることが大切」というお話をされていて、改めて環境の大切さについて考えることができた（2021年度）。 ・J 保育園と M こども園の個々を尊重する素敵な保育現場が見れてよかったですし、資格のない先生方がご活躍する姿の紹介もいろいろなこども達との関わり方がある事が知れてよかった（2021年度）。 ・Y 先生のパワーと保育への想いの強さに感激した。このような子供への愛情を惜しみなく注がれる先生の元でお仕事ができる保育士さんは幸せだなと思った。私自身、このマインドのようなものをしっかり心に覚えておきたいと思い、今後のエネルギーをいただいた（2021年度）。 ・子どもにとって、自分の考えを作り出していくことの大切さや認めてもらえる人的環境、遊び込める物的環境の大切さを改めて感じた（2021年度）。 ・他の方がどんな質問や悩みがあるのかお聞きでき、先生方のお話も大変勉強になった。園の様子や保育の様子も拝見でき、「私もやりたいなあ」という気持ちが増した（2021年度）。 ・他の受講者の方の思いも聞けて、色々なバックグラウンドのなかで向かっている姿に自分も頑張ろうと思った（2021年度）。 ・今日の保育園やこども園のお話を聞いて、私のようなものでも園によっては役に立てる事があると分かり、少しだけ前よりも一歩を踏み出す勇気をもらえた（2021年度）。 ・グループを分けることで質問もしやすく、今の悩み相談や保育者のマインド、園の大切にされていることを知ることができ、現場に出る際のイメージもしやすくなった。あたたかい雰囲気の中、他の受講生のお顔も見れる機会に恵まれて非常に有意義な学びの時間だった（2021年度）。 ・K 保育所の素敵な先生方に会い、いつか先生方のように輝く保育士になれることを夢見て、人生で今日が一番若い日だと思って、1歩踏み出そうという気持ちになることができました。子どもたちの手の温かさ、優しさ、感動しました。まさかダンスやお店ごっこにまで参加させて頂けるとは思わず、本当に感謝の気持ちばかりです。給食も優しいお味でとてもおいしかったです。今日先生方や子どもたちから頂いた温かさを忘れずに、まずは仕事を探して行きたいと思います（2022年度）。 ・昨年の zoom でも園の紹介やお話を伺え、大変良い経験をさせて頂きました。今年は実際に現場を見せて頂いた分、園の環境や温かさを肌で感じ、見たい部分も見れ、昨年とはまた違った学びになりました。他の参加者の方とお話しできた事も大変良い経験になったと思います（2022年度）。 					
【学びに繋がらなかった理由の記述例】					
<ul style="list-style-type: none"> ・今回の講座は、ちょっと薄っぺらで、もっと掘り下げたお話が聴きたかった（2021年度）。 ・参加者のお話しや質問の時間がもう少しあればと思った（2021年度）。 ・参加者も皆さん興味深い方々だったので、もっと他の方のお話も聴けたらと思った（2021年度）。 ・他の園のお話も聴きたかった（2021年度）。 					

表13 プログラム全体の成果に関する項目の年度ごと比較

項目	全体の M (SD)	2021年度の M (SD)	2022年度の M (SD)	t 値	効果量 (d)
プログラム全体の満足度	4.60 (0.75)	4.48 (0.90)	4.74 (0.44)	1.79	.35
プログラムの趣旨や意図の理解	4.70 (0.48)	4.66 (0.51)	4.74 (0.44)	0.80	.17
保育職の就職・復職への意識の変化	4.20 (0.71)	4.19 (0.66)	4.23 (0.71)	0.19	.05
保育職の継続意識の変化	4.29 (0.76)	4.20 (0.86)	4.38 (0.76)	0.64	.23
保育者効力感の変化			1.87 (0.48)		

注：保育者効力感に関する調査は、2022年度のみ実施された。

Ⅲ (総合考察) 2年間の「潜在保育者プログラム」の成果と今後の課題

(1) オンライン(オンデマンド)講座の効果

2年間のオンライン講座の効果として最初に挙げられるのは、参加者人数の増加である。以前は鎌倉女子大学での対面開催に限定していたが、2021年までの3カ年の参加者数は28人(2017)、35人(2018)、63人(2019)と低位で経過していた。

一方2021年度参加者数は1,211人、2022年度1,154人と急増していることに注目したい。参加者の居住範囲にも変化が見られ、北は北海道、南は鹿児島県と、広域に広がっている。表3に示されたように、オンライン(オンデマンド)講座であることにより、「いつでも何処でも学ぶことの出来る潜在保育者プログラム」の効果であると確信できた。

また、プログラムに参加した動機が明らかになったことも大きな成果である。7つのカテゴリー(保育への興味、プログラム内容への興味、就職のため、資格取得のため、自己研鑽、子育てや子育て支援のため、受講のしやすさ)が明確になり(表3)、この講座の趣旨の妥当性、すなわち『有資格者のみならず、資格がなくても子ども・子育てに関心のある全ての者を対象とし、誰もが子育ての当事者』意識を高めながら、地域全体の子育て支援に繋げていくプログラム』に賛同し参加したことを裏付ける結果が得られたと言える。

(2) 講座「保育実践のマインド&スキルズ編」について

A講座「保育実践のマインド&スキルズ編」の2年間を通し得られた成果は、所謂、「潜在保育者」を発掘し、そのニーズに合ったプログラムが展開できたことである。

「保育職の就職・復職への意識の変化」($M=4.20$)、「保育職の継続意識の変化」($M=4.29$)と何れも効果が高く、現場で働く契機となったことは明らかである。一方、「保育者効力感の変化」($M=1.87$)の効果は低く、「明日から現場でやっていける」という強い自信(信念)獲得には至っていなかったことも分かった。そもそも「保育者の効力感」は、日々保育に勤しんでいる状態の保育者が感じる効力感であり、この結果を鑑みると、まさに受講生が「潜在保育者」で在ることを裏付けるものと考えられる。

結果から言えることは、この講座が「保育の専門家に繋げる講座」を目指しつつも、その導入教育を担うべき存在であることを意識する重要性である。保育現場で働いてみたい、子育て支援に関わりたいとする参加者の意欲の表れとして「オンデマンド講座の期間を延長してほしい」を始め、時間を掛けて繰り返し学修したいとする多数の意見が得られ、今後のプログラムを改善する手立ても見えてきたところである。このように、オンデマンド講座として試行したA講座への評価は総じて高く、保育現場に一步踏み出すための「導入教育」としての効果は高く、今後も継続していくことが望まれる。

また、アンケート結果より受講者の学修内容への興味が多様であることも明らかとなり、現代のニーズに応える新たな視点を加味することが示唆された。例えば、「保育とICT」「手遊びやわらべ歌」「造形や絵画」などの新たなコンテンツを希望する意見が散見された。また、既に開講された講座の中では「障害児の保育」をより深く学びたいという意見が多かったことから、既存の動画をブラッシュアップしていくことが望まれよう。この点は、他の講座についても同様である。

(3) 「保育現場で学ぶ編」及び「経験豊富な保育者とのサークル・カフェ」について

この講座は保育現場の実地を体験し、保育環境等保育の様子を観察後、経験豊富な保育者達との対話を通して、潜在保育者が今後現場で働く際の様々な役割への気づきや示唆を

得るために開設した目玉講座である。

2021年度はB「保育現場で学ぶ」をオンデマンド配信に、C「経験豊富な保育者とのサークル・カフェ」は対話形式が重要であるとしてZoom配信（双方向型）として実施した。2022年度は本来の实地体験学修に移行し、BC合体の「経験豊富な保育者とのサークル・カフェ（現場から学ぶ）」を対面実施した。

成果としてあげられるのは、現場の保育者からの直接指導が、受講生の現場復帰への動機を高める効果や、子育て支援者として一歩踏み出す契機となっていることが分かった。

課題として浮かび上がったのが、受講生の経験知の違い（保育現場経験者と未経験者）を鑑みた講座の在り方に注目しなければならないという示唆を得られたことである。

例えば経験者群からは、学びに繋がらなかった理由として、「既に知っていることが多かった」ことや、「保育者の労働環境や労働条件などの保育者を取り巻く現代的な課題にも言及してほしかった」という意見が得られた。一方で、「保育士と非常勤職員ごとに1日のスケジュールを見たかった」という初歩的意見が挙げられるなど未経験者だから希望する講座への意見も散見された。今後は保育現場経験者と未経験者の両群を想定し、講座をブラッシュアップしていくことが必要であることが示唆された。

対面講座（2022）では参加者の人数は少なかったものの、「子どもたちの手の温かさ、優しさ、感動した」「園の環境や温かさを肌で感じ見たい部分も見られ、昨年とはまた違った学びになった」等、オンラインでは得がたい保育現場に対する理解（雰囲気、環境構成、保育内容の実際等）に至っている意見が伺え、臨床的な深い学びを体感することができたのではないと思われる。

このように対面講座の効果は非常に高いと思われるが、遠方の受講者や有職者にとっては参加のできない状況が伺えるため、2023年度以降はハイブリット形式で開催する等の新たな方法を提案していきたいと思っている。

以上、かまくらプロジェクト「潜在保育者プログラム（2021-2022）」は、地域子育て支援を担う人材育成の可能性を秘めた講座であると確信しているところである。

【引用文献・参考文献】

- 1) 三木知子・桜井茂男(1998) 保育専攻短大生の保育者効力感に及ぼす教育実習の影響
教育心理学研究, 46(2), 203-211.
- 2) 西山修(2018) 保育者の専門性の基盤となるアイデンティティと効力感 中坪史典(編)
テーマでみる保育実践の中にある保育者の専門性へのアプローチ (pp. 296-305), ミネルヴァ書房
- 3) 小泉裕子(2016) 保育者アイデンティティの形成過程 鎌倉女子大学学術研究所報第16巻, 13-20.
- 4) 厚生労働省(2013) 保育士の確保に向けた総合的な取り組み
- 5) 厚生労働省(2015) 保育士・保育所支援センター設置運営事業の実施について
- 6) 厚生労働省アフターサービスセンター(2015) 保育士・保育所支援センターの取り組み事例に関わる調査—保育士人材の確保を目指して—